

巢鴨商業地区における風土形成試論

The Notes for Social Climate study of the Shopping districts in Sugamo, Tokyo
Subject, Method and a Research Review小長谷 悠 紀*
KONAGAYA, Yuki

Abstract: The purpose of this study is considering for process of making towns induct their tolerance and comfort as their social climate, and finding a inductive inference on it, well supported. Sugamo shopping district near the gate of 2 temples is known which has a favorite by elder ladies. I would like to see a process in it, through observation and interviews of its inhabitants about their own town, the act of collecting literature and documents, and repeated consideration. This notes is its interim report. It shows the variety of districts surrounding Sugamo shopping district and the study trends of in and around Sugamo. From a review on study, including historical research but Sugamo prison study, 2 categories were founded. The historical studies mostly have taken subjects, such as business and facilities requiring acreage and/or keeping away from built-up area. born It means, Sugamo around was so characterized as periphery. Another one are consisted of two groups; one is interest in spatial design, town function, usability, the other wants means for commercial revitalization.

Key words: 商店街 (shopping district), 風土 (Social Climate), 周辺街区 (districts surrounding), 周縁の地 (periphery), 研究レビュー (Research Review), 巢鴨 (Sugamo, Toshima-ku, Tokyo)

- I 風土形成プロセスを考えること
 - 1) 研究の背景
 - 2) 概念の定義 風土
 - 3) 仮説
 - 4) 研究の課題, 方法
- II 対象地域, 背景としての周辺地域
 - 1) 対象地域
 - 2) 周辺地域
- III 巢鴨地域の文献資料
 - 1) 文献資料の蒐集状況
 - 2) 既存研究動向

3) 考察

I 風土形成プロセスを考えること

1) 研究の背景

高齢化社会の進行, 温泉街や商店街の衰退を経た再生の機運, ヒューマンサイズの都市への再評価などを背景に, '歩けるまち' への関心が高まった。「長崎さるく」や「オンパク」といった観光事業は, 外からの集客もさながら, 開催に際しての市民の協働や事後も継続した活動の促しに奏功

* 高知県立大学文化学部・教授

した「まちづくり」として一層の評価を得た。住民が車社会型の大規模開発を否定してそれとは対極的なプロセスを選び、観光客にも支持される豊かな商業地区が創出されたサンフランシスコの事例も報告されている（畢，2014）。

まちを歩く観光では、従来以上に、訪れる人とまちの人との接近・遭遇の機会が増し、両者のコミュニケーションの質がかつて以上に問われるのではないかと思う。換言すれば、人々が外来者を受け入れることに比較的抵抗感がなく良い関係を築きやすい空気があるまちは「住んでよし、訪れてよし」になり易いであろうし、閉鎖的とみなされるようならそのような展開は困難であろう。でかけた先で「良いことがあった」、「あのまちは良かった」といった印象を持つ際、そこでの人との出逢い・やりとりが重要な要素となることは、滝波（1998）、小長谷（2000）、原田（2003）等が、旅行・参拝などをする人の経験に着眼し、明らかにしている。

2) 概念の定義 風土

良い関係を築き易いまちの空気、雰囲気、気質、郷土性、土地柄。類語はいろいろありそうだが、本研究は、操作上、次のように定義しておく。

ある土地に関連づけられる、そこに暮らす／いる人たちの社会的関係に関わる性質のことを、「風土」【Social Climate】と呼ぶことにする。

‘ひらかれたまち’の風土は、どのように育まれるのだろうか。かたや「開放的」かたや「閉鎖的」といったまちの対照性が生じるのは、どのようなプロセスがあつてのことなのか。あるいは、そのまちがひらかれている—外来者を迎えることへの歓待性／開放性／寛容性などに長じている—と地域社会成員ら自らが認識し、そのことを受け容れて同調しているのだとすれば、そのような認識は一体どのようにしてもたらされたのだろうか。

いずれにせよ、それらのプロセスはその土地により日常的にいる人びとのその場所への心象に関わっているものであろう。目下の仮説としては、「我がまち」という表現をヒントに次のように考えてみた。

3) 仮説

‘我がまち’への認識は、人びとの日々の暮らしの中での対話、見聞、空間認知などの「経験」に影響されながら、個人の心象として形づくられる。それはしばしばその土地流の価値観を内面化したもので、ある種のものごとに対しては自明性すら伴っているかもしれない。また、そのような個人の心象に連動して、その土地においてより集合的な心象が創発され、優勢的なものとして継続していくなら、それは風土の構築と呼べるのではない。優勢化した風土は、それぞれの土地で、「この辺りでは、やって来る人にこのように対応するのが当たり前だ」といった、土地土地のセオリーを人びとに示すのである。

そうであるとすれば、‘我がまち’やその外来者が、地元の暮らしの中で、どのようなものとして見られ、聞かれ、話し合われてきたのかといった人々の継続的な経験に、まちが‘ひらかれていく’要因がもためられるのではないか。そのような仮説が、本研究の発起点である。

4) 研究の課題、方法

仮説を緻密化し、理論へと統合していくためには、先ず、論材としての質的データが必要となる。本研究では、それは人びとがまちに関係づける「経験」（の語り）ある。採取の場には、東京都豊島区の巣鴨のまちを選定した。

研究の課題は、二段階に設定した。

ひとつは、戦後昭和期における巣鴨の「まちの経験」を採取し、表現や文脈を整理することである。巣鴨の人たちに訊くのは、まちについての心象である。境界、固有性、物理的・心理的な危うさの有無、変化、こどもの頃の行動範囲、まちの思い出などである。それから、土地の歴史や社会的・地理的環境要因を整理する。これらは、主に文献資料等から見いだされるであろうが、インタビューでも何かわかるかもしれない。

第二の課題は、巣鴨商業地区の戦後昭和期の変遷を再構成することである。再構成というのは、これまでも既に、川添（1991）、天野（1993）など、巣鴨地藏通りや通り沿いのとげぬき地藏尊境界について1990年前後までの変遷を論じたも

のがあるからである。

本研究では、まちのひとに聴いたこと、観たことなどのフィールドワークの部分と、文献や識者の見解、あるいは資料から伝わること、これらを考え併せ、随所で見直しながらか察していく¹⁾。

期待する成果としては、地域性や此処らしさ、昔話や由来所説などが、個人の心象よりも集合的な「まちの記憶」として共有されるプロセス、蓄積されて、人の活動を促したり、まちづくりの方法や景観、集合的な価値観などに反映されていくプロセスを見出したいと考えている。

研究は途上であるが、これまでの構想、課題と方法論、巣鴨やその周辺地区への捉え方、既存研究の整理・類型化までを、粗削りで部分的ではあるけれども一旦報告し、今後の研究全体を緻密にしていけるよう、各位にご助言を仰ぎたい。

II 対象地域、周辺地域

1) 対象地域

対象地域とした巣鴨の商業地区は、かねてより筆者が外部にひらかれた印象をみとめていたまちのひとつである。たとえば、「おばあさん

の原宿」という言葉がまちで拾われ、報じられたのは1987(昭和62)年であるが(『読売新聞』1987.1.22.)、それ以前の1970年代から80年代にはこのまちは既に「おばあちゃん」たちに支持されていた。その頃の日本で、シニア・マーケットは今日のように目立った存在ではなかったはずだ。むしろ年配の女性たちは消費の仕掛け人の目に入らずに疎外されていたような存在ではなかったかと、筆者は思っていた。その後、巣鴨に年配女性が集まっている現象に注目した研究の幾つかは、参詣の来街者・滞留者などがこのまちに居心地の良さを見出していたことを示し(川添, 1991, 浅川, 1993, 原田智子, 2003)。また別の幾つかは界限での人間関係の構築や会話の発生しやすさに着目した(中村, 後藤, 三宅, 2000, 岩田, 伊藤, 2010) ここには、何がしかの風土があるように思われた。

地図(図1)は、住所表示の丁目割りが太く表されている地形図を用い、丁目と商店街、主要な2つの寺の位置関係が判るように作成した。頁中に合わせた為縮尺を入れていないが、真性寺付近から庚申塚まで続く巣鴨地藏通り商店街の長さが約770mである。



図1 巣鴨(丁目区分図)

寺は左上:とげぬき地藏の高岩寺, 右下が真性寺。学校は仰高小学校。他の寺や学校は図が煩雑になるため記載していない。(背景地形図出典「豊島区地図情報システム」2017年1月)

地元の人²⁾に訊く「巢鴨のまち」の範囲は、聞いてみてから考えることにして対象地域の定義はこれまでしてこなかった。2016年夏までの調査では、白山通り（国道17号）から巢鴨地藏通り沿いに連なる、巢鴨1丁目から4丁目までの、所謂「3商店街」（南から巢一商店街、巢鴨駅前商店街、巢鴨地藏通り商店街）と巢鴨駅近辺の飲食店街付近が、「このまちの（商店地区の）話」として述べられることが多かった。

主な交通機関と商店街の位置を確認しておく。白山通りは、巢鴨駅のところで崖下の山手線線路をまたいでいる。この通りは、片側3車線ベースで、横断歩道の向こう側に立っている人の表情が見づらいくらい巾広い。白山通りの上を都バスが、下を地下鉄都営三田線が走っている。

巢鴨一丁目の巢一商店街は、環状線内側で最も都心側に位置し、文京区と接している。線路を越えると、駅前商店街である。この商店街は東側が都営バス営業所（地図では「巢鴨2丁目」の文字付近）の手前まで、西側は真性寺の手前までである。線路を挟むこの2つの商店街は、表通りだけでなく、通りから曲がっていく数ブロックにも加盟店がある。なお、JR駅直結以外の地下鉄出入口3つは、すべて駅前商店街の歩道部分にある。

真性寺前で、国道は旧中山道と離れる。巢鴨地藏通り商店街は、バイパス状になった旧中山道の商店街である。国道との分岐地点西側にアーケードと広場を構え、約770m、庚申塚まで続く。

その先は豊島区西巢鴨で、付近の交通機関は、庚申塚の交差点を越えてすぐに都電荒川線の庚申塚電停がある。ここまでくると、三田線では巢鴨駅より西巢鴨駅が近い。旧中山道沿いにさらにさらに進むと、旧・板橋宿に至る。

2) 周辺地域

商店街の状況の変化に影響する環境要因には、国内や都市全般に関わるようなマクロ要因（政変、災害、あるいは人びとの志向などの社会の潮流、それより短期的な流行など）とともに、ミクロな環境要因として、商店街利用者の居住地や勤務地として捉えられる周辺地区の状況が挙げられる。時代時代の商店街周辺街区のあり様は、商店

街の変容の要因になり得たはずだ。

周囲を概観すると、巢鴨の3商店街の周りには、次のような地区が見いだされた。それは、ぱっと見にも、かなり異なった印象のまちである。

地図で街区の大きさを見ると、白山通り東側で、文京区のほうから豊島市場のあたりまで街区一帯が広がっている。ここは山の手台地東端の一部で、市場は江戸期の御薬園の跡、その手前までが中山道沿いの武家屋敷地だった。街道は尾根を行くので、3商店街もみな台地上である。巢鴨から大塚方面へはおよそ西方向への下り坂、駒込側へは北方向に下り坂となっている。この巢鴨台地をささむ双方向の斜面に、染井・駒込・巢鴨での集積が知られた江戸や明治の植木屋の庭がつくられていたという（川添、菊池、1986：101-103, 107-114）。

地図の文マークは、豊島区立仰高小学校（駒込5丁目）である。聴き取りの協力者の多くは、この卒業生である。仰高小学校の周り一帯は、維新後、徳川・松平家と三菱・岩崎家が多くを所有してきた地区で、都立染井霊園（1872＝明治5年開設）、三菱の社宅やスポーツ施設・グラウンド、東京スイミングセンター、本郷中学校・高等学校、区立駒込中学校など、比較的敷地の大きな施設が連なっている。

線路より南側の六義園と大和郷は、区界を越え文京区本駒込である。六義園は武家屋敷の庭の一部が、三菱・岩崎家別邸を経て都立公園になっている。大和郷は別邸時代の敷地から大正末期に分譲された宅地であり、高級住宅地となっている（藤谷、1987）。

次に商店街の北と南を見よう。

巢鴨地藏通りの北側の入り口付近には、庚申塚がある。江戸をでて最初の立場（休憩所）として知られるが（豊島区立郷土資料館、2007：1-5）、小田内（1918：95-101）によれば、この付近は大正期に急速な都市化をみたところだ。「王子・滝野川・板橋の三町」に「欧州戦争後新たに小工場の続設」ができ、「巢鴨村など所どころに散点」し、周辺に「職工町」ができたという。「中山道沿巢鴨町の北裏」はそのような居住地区のひとつで、「建坪六畳一間・三畳一間位のもの多く、巢

鴨四丁目に於いては貸地に何れも六畳一間の長屋が軒を並べ、「中山道街道沿いの南裏」には「巢鴨町百軒屋」があった。表通りでは、巢鴨から北区滝野川にかけて、農産種子の卸売商が全国から客を迎える一大集散地を築いて、明治期から昭和戦前まで「タネ屋通り」が繁盛していた。西巢鴨、滝野川などの種子卸商は不景気知らずで、地方からの種子の買い付け客が少なくてもタネ屋に三泊して、「種子ができるまで毎日浅草へ行って遊んで来たり」していた（鈴木編、1992：113-114）。

一方、巢一商店会の南にあたる白山通り西側の文京区旧・小石川西丸町付近は、小石川の印刷工場集積周辺に連なる細民地区のひとつであった。この辺りのことについて、筆者が話した巢鴨一丁目の婦人は、区画整理が行われて道が広がった「白山通りのひどく狭かったあたり」と記憶されていた³⁾。

このように、巢鴨商業地区の周辺地域には、ゆったりとした区画を屋敷地から受け継いだ施設集積や分譲住宅街があり、また、低所得者が貸家に身を寄せ合って暮らすような高密度の街区として始まったまちも在ったわけである。近隣の街区は、商店街の業種や賑わいに影響していたと考えられる。巢鴨駅を囲む台地上は、各戸の敷地の広さから、人口密度は低い。対して、通りの南北にははるかに大勢人がいたようにみえる。

また、王子・滝野川・板橋方面と小石川方面の工場地区は、市電と王子電車で大塚につながっており、大塚駅近辺に繁華街が生まれ、大塚三業地が形成された。豊島区域へのデパートの出店が一番早かったのも大塚駅前である（郷土出版社、2014：50）。

1922（大正11）年に参詣者の増加した高岩寺縁日の混雑で死者がでたという記録があるが（中山、1925：246）、この頃の地藏尊への参詣主流経路は、おそらく今日のように巢鴨駅側からではなく庚申塚側からより多くの人が参詣していたと推察される⁴⁾。

ここでは、周辺街区の形状や由来の多様性を確認した。今後、それぞれの街区が、昭和戦後期にどのように変化したか／しなかったか、地図や現地踏査で観ていきたいと考えている。

Ⅲ 巢鴨の文献資料

1) 文献資料の蒐集状況

文献資料の蒐集は、2012年度の研究開始時から2016年まで断続的におこなった。

初期段階では、巢鴨という地域や名称に関わる資料の種類や広がりが見定めづらいことから、史的経緯、交通条件の変化、これまでにとりあげられてきた主な話題、書籍の所在などを概括するため、区史通史編や年表を用い、巢鴨関連年表を作成した。年表には、後から入手した資料からの情報も折々に書き込んでいった。

区役所、区立図書館、および豊島区・文京区の資料館で見られる資料はできる限り閲覧に行き、資料の種類ひろがりを見ながら、その場の判断で選択的に入手した。

地域の有志や商店街で編まれた資料は、上述の資料類からか、行った先々で存在を知ることが多かった。したがって、網羅的には集められていないが、入手されたものは概して優れた資料であった（表1）。なお、武考商店は、西巢鴨の化粧品卸商であり、同書は回顧録である。また、巢鴨には、フリーペーパーのタウン誌がある。初代は『巢鴨百選』（1994.12～2011.12）で、『タウン誌すかも』（2012.7～現在に至る）は先代の廃刊により巢鴨のタウン誌消失を嘆く声から創刊された。『巢鴨百選』のバックナンバーや表1の「巢鴨乃むかし」は区立巢鴨図書館にある（一部欠巻がある）。この他、2012年に豊島区が「記憶の遺産80」で区内各所から語り手を迎えた動画資料を作成している⁵⁾。

ペーパーや学術書籍の蒐集はCiNii Articleを用いた。「巢鴨」というキーワードによる検索では、東京裁判と拘置所（巢鴨プリズン）に関する文献が大量にヒットしたが、これらはひとまず蒐集対象とはせず、タイトルをみて外した。「巢鴨」「地藏通り」「六義園」で検索した。この他、入手した資料中に現れた文献や報告書名を書きとめ、選択的に入手した。

この他、巢鴨駅前商店街振興組合から総会記録をお借りした。都立中央図書館所蔵「豊島区商業地域診断報告書」（1970）と併せ見ると、昭和40

表1 商店街組織・地域有志等による資料

1967 (昭和 42)	武井孝次郎『巢鴨の町角に 武考商店の歩みと共に』
1985 (昭和 60)	5月「巢鴨のむかしを語りあう会」発足。 2000年までに座談会記録「巢鴨乃むかし」1~4集。
1993 (平成 1)	巢鴨駅前商店街振興組合「もてなしの街すかも」 谷根千工房編集で刊行
2000 (平成 12)	仰高西小学校同窓会編 「わが街大塚巢鴨わが母校仰高西」128p.
2010 (平成 22)	巢鴨地藏通り商店街振興組合 「巢鴨地藏通り商店街について」(視察者用資料) 30p.
2012 (平成 24)	巢鴨駅前商店街振興組合『巢鴨史跡散歩』
2014 (平成 26)	巢鴨地藏通り商店街振興組合 「巢鴨地藏通り商店街 2013 “おばあちゃんのまち・すかも” 物語」(振興組合法人化 60周年記念冊子) 45p.
2014 (平成 26)	木崎茂雄『ぶらり、ゆったり、今こそ癒しの街・巢鴨』 展望社, 198p.

年代からの商店街活動がよくわかる。

2015年には「ヨミダス歴史館」を用い、「巢鴨」「高岩寺」で読売新聞東京版の記事を検索した。稿を改めて報告したい。

2) 既存研究動向

表2は、筆者が巢鴨のまちとその周辺地域の研究動向や歴史的経緯を把握するのに用いた研究論文のテーマ領域別分類で、表3にもとづいて作成した。戦前の研究者によるものは表3に一冊挙げたが、表2では省スペースのために割愛した。

表3では、書誌情報とともに、リサーチ・トレンドを併せみる観点から、研究論文、学術大会報告を中心に、それに準じる研究資料とみなされたシンポジウム記録、座談会記事、雑誌特集記事は表に含め、町史区史、豊島区の遺跡調査報告および博物館や区立の郷土資料館が展示に関連してまとめた資料類は、割愛した。

まず、表2に照らしてみていく。

① 仏教と地域社会と大正大学

大正大学を拠点に、半世紀を経て仏教と地域の関係が再びとりあげられている。1960年前後に大正大学が仏教系大学の提携研究を行っており、大都市圏での寺院の社会的機能というテーマで、高岩寺が事例とされた。財団法人教徒文化交流協会で報告書が出され、大正大学図書館に所蔵がある(川崎・柏熊・真田, 1959)。対住民アンケートも実施されたが、単純集計報告が中心で、調査原票への掘り起こしアクセスはできなかった。2014年12月、大正大学で「地域社会と仏教」をテーマとするシンポジウムが開催された。

② 江戸期研究の主流 園芸・造園の史的研究

1979年の川添『東京の原風景』が江戸の植木屋の集積をとりあげ、巢鴨・染井の植木屋の仕事、植樹、六義園や植木屋の庭などの名所化、巢鴨のつくり菊・菊見などの史的研究が、平野、小野、秋山らけん引的論者を得て継続的に展開されている。区の学芸員による紀要論文や造園研究誌への投稿が中心である。なお、ここでは近世に分類したが、一部の研究はもっと後の時代にも及んでいる。

③ 2000年代の武家地と町人地の研究

前者が北郊に武家屋敷や町ができた原因を解説し、後者がその結果できた巢鴨の町を解説している。岩淵『江戸武家地の研究』は、江戸北郊へスプロールした武家屋敷の様子を、駒込の事例で明かにした。巢鴨台地の武家屋敷も、同様であったと考えられる。また公文書館から「巢鴨町軒別絵図」が新たに見いだされ、現在の3商店街のルーツともいえる旧中仙道の町人地の様子が詳細に明らかになった。史料発見者の高尾の論文と区教育委員会の橋口・成田による文化材リポートがある。

④ 近代の近郊施設の研究

医療史や教育史として施設の史料にあたるものの、施設の立地や移動といった都市政策などを検討する研究がある。明治から大正期の前半まで、広い敷地を必要としたり、まちなかに建てづらい

表2 巣鴨周辺の地域に関する主な既存研究の領域（1951-2016）

	～ 1960	～ 1970	～ 1980	～ 1990	～ 2000	～ 2010	～ 2016
江戸	—	—	1	2	3	10	4
園芸・行楽地 武家地 町人地 とげぬき地蔵			1	2	2	6 1 3	4
近代	—	3	—	2	4	6	1
近郊施設				学校 1	寺 2 病院 1	工場 1 学校 1 墓地 1 病院 1	
郊外住宅 タネ道		文士日記 3		宅地開発 1	1	2	養蜂環境 1
戦中	—	—	—	—	隣組 1	—	—
現代	7	—	3	2	9	14	5
信仰・寺の貢 献救済	寺と地域 5 生活相談所 1				高岩寺誌 1	境内禁煙 1	シンポジウム記録 地域と仏教
防災			爆発火事 1				
共同住宅	1						
広場・通り 滞留空間			緑日、境内の にぎわい 2				
高齢者の原宿/ 盛り場化				1	7		
まちの機能					1	9	3
商業地施策						4	I

欄内数字は文献数, ただし倉沢編, 1993は執筆者の異なる各章を1篇と数え計6篇とした. 表3のリストにもとづく.

表3 巣鴨周辺の地域に関する主な既存研究（年代別）

年	文 献
1918	小田内通敏『帝都と近郊』大倉研究所
1953	三菱鉱業 KK 施設部「三菱鉱業株式会社駒込アパート」『建築文化』8 (5) 9-11.
1958	吉田雅男「とげぬき地蔵の信仰調査（地蔵特集）」『佛教と民俗』2, 22-29.
1959	柏熊岬二「寺院動態調査の概況」『大正大学学報』12, 2面.
1959	川崎惠璋・柏熊岬二・真田智光「都市寺院の社会的機能その一」財団法人佛教徒文化交流協会
1959	吉田雅男「門前町の一考察, 東京巣鴨地区調査」『大正大学社会学・社会事業研究室紀要』34, 20-26.
1960	柏熊岬二「都市寺院の社会的機能に関する実態調査報告書」『大正大学社会学社会事業研究室紀要』34, 1-17.
1960	塚本哲「とげぬき生活館の発足—社会福祉研究および学生実習の場として」東洋大学社会学部紀要 1 (1) 28-48.
1964	柳田知常「岩野泡鳴の『目黒日記』および『巣鴨日記』(I)」『金城学院大学論集, 国文学特集』8, 51-86.
1965	柳田知常「岩野泡鳴の『巣鴨日記』(II)」『金城学院大学論集, 国文学特集』9, 63-101.
1967	柳田知常「岩野泡鳴の『巣鴨日記』(III)」『金城学院大学論集, 国文学特集』10, 55-98.
1971	都市デザイン研究体, 日本の広場・ケース・スタディ『建築文化』298, 143-170.
1974	東京消防庁予防部調査課「東京巣鴨佐々木化学の爆発火災について」『日本火災学会誌』24 (3) 187-191.
1975	名執芳博「都市におけるハレの場の創出に関する考察—緑日及び市を中心とした調査研究」『都市計画別冊』(10) 109-114.
1979	川添登『東京の原風景』日本放送出版協会
1983	小野佐和子「江戸郊外の遊覧地」『造園雑誌』46-4, 235-250.
1985	磯崎嘉治『巣鴨と明治女学校』クオリ

- 1986 川添登, 菊池勇夫『植木の里』ドメス出版
 1987 日本生活学会考現学グループ「おばあちゃんたちの原宿」『春秋生活』1, 105-120.
 1987 藤谷陽悦「大和郷住宅地の開発」山口廣編『郊外住宅地の系譜 東京の田園ユートピア』鹿島出版会, 134-152.
 1989 川添登『おばあちゃんたちの原宿—菓鴨とげぬき地蔵の考現学』平凡社
-
- 1991 川添登「菓鴨とげぬき地蔵の変容と発展「おばあちゃんたちの原宿」は、どのようにしてつくられたか」『国立歴史民俗博物館研究報告』33, 43-74.
 1991 松本泰生, 千葉一輝, 戸沼幸市「東京の寺町に関する研究 その3 寺院の移転と寺町の形成について」『建築学会大会学術講演梗概集東北』89-90.
 1992 鈴木光蔵編「座談会, 滝野川中山道の野菜たね屋」『北区史研究』1, 108-127.
 1993 倉沢進編『大都市高齢者と盛り場』日本評論社, 東京都立大学都市研究所(2001復刻)
 各章執筆者: 倉沢進, 天野徹, 浅川達人, 高木恒一, 飯田俊郎, 西澤晃彦
 1996 伊藤暢直「菓鴨二丁目町会第一部隣組に関する若干の考察」『生活と文化』(10) 60-67.
 1997 綾部優子「日本における明治期の精神障害者リハビリテーションの歴史的研究」『障害者問題史研究紀要』(38) 25-44.
 1997 千葉一輝, 戸沼幸市「近代以降における寺院集積の変容について」『日本建築学会計画系論文集』(491) 149-156.
 1999 小野佐和子「柳沢信鴻の隠居所としての六義園」『ランドスケープ研究』62-5, 417-422.
 1999 圭室文雄「とげぬき地蔵と治病」『日本風俗史学』9, 2-18.
 2000 小野佐和子「六義園に見る安永・天明期の『庭見物』」『ランドスケープ研究』63-5, 361-366.
 2000 来馬規雄編『とげぬき地蔵尊高岩寺誌』高岩寺
 2000 中村隆, 後藤春彦, 三宅論「都心商店街における高齢者の余暇活動と商店の取り組みに関する研究」『日本建築学会学術講演梗概集東北』563-564.
-
- 2001 秋岡栄子「お年寄り」のまち「若者」のまち「菓鴨」と東京「お台場」の賑わいに学ぶ『月刊観光』(415) 28-31.
 2001 竹内宏『とげぬき地蔵経済学』メディアファクトリー
 2001 平野恵「江戸園芸の仕掛人「連」から植木屋へ」(総力特集 江戸のガーデニング)『歴史と旅』28 (3) 66-71.
 2002 井原久光「商店街活性化に関する考察—菓鴨・小布施・長浜を事例にして」『長野大学紀要』24 (1) 61-83.
 2002 太田尚宏「王子飛鳥山にみる新興行楽地の形成」『地方紙研究』(52) 4, 23-26.
 2003 秋山伸一「江戸北郊地域における花名所の創出」地方紙研究協議会編『江戸・東京近郊の史的空間』雄山閣, 115-138.
 2003 濱本慎平他「国立・山手・馬車道・菓鴨における「気配」の心理量シークエンス分析」『日本建築学会学術講演梗概集東海』979-980.
 2003 原田智子「盛り場・菓鴨に集まる高齢女性の「場所の経験」」『法政地理』35, 37-48.
 2003 平野恵「幕末から明治前期における江戸・東京の植木屋の庭の名所化」『旅の文化研究所研究報告』(12) 33-50. 「十九世紀江戸・東京の植木屋の多様化」地方紙研究協議会編『江戸・東京近郊の史的空間』雄山閣, 139-166.
 2003 横山恵「北豊島郡の工業化について」地方紙研究協議会編『江戸・東京近郊の史的空間』雄山閣, 241-283.
 2004 岩淵令治『江戸武家地の研究』塙書房
 2004 斎藤恵美音, 田代順孝, 木下剛「菓鴨地蔵通りの商業空間の発展と変容に関する基礎的研究」『日本造園学会全国大会研究発表論文集』22, 749-752.
 2005 此経啓介「明治時代の文化政策と宗教政策—公営墓地の誕生をめぐって」『日本大学芸術学部紀要』43-60.
 2005 高尾善希「菓鴨町軒別絵図」の世界」『立正史学』99, 243-245.
 2005 橋口定志, 成田涼子「文化財レポート, 江戸周縁の町「菓鴨」の調査と地域研究」『日本歴史』684, 89-96.
 2006 大島秀明, 天野克也, 谷口汎邦「商店街来街者の座りスペース利用に関する研究, 菓鴨地蔵通り商店街の場合」『日本建築学会計画系論文集』(610), 41-46, 「商店街における座りスペースの利用実態, 菓鴨地蔵通り商店街の場合」『福山大学工学部紀要』30, 185-190.
 2006 高尾善希「近世菓鴨町の機能と景観」『交通史研究』61, 3-24.
 2006 平野恵『十九世紀日本の園芸文化—江戸と東京, 植木屋の周辺』思文閣
 2007 金川英雄「明治大正までに創設された東京の私立精神科病院」『日本医史学雑誌』53-1, 66-67.
 2008 北島宗雄他「高齢者を対象とした駅の案内表示のユーザビリティ調査—認知機能低下と駅内移動行動の関係の分析」『人間工学』44 (3) 131-143.
 2008 柿沼美紀, 十代田朗, 津々見崇「高齢来街者の滞留行動特性に関する研究」『日本都市計画学会都市計画論文集』43-3, 625-630.
 2008 関正樹「菓鴨地蔵通り商店街の新たな街づくりに関する事例研究—国道17号線の拡幅事業を契機に進む市街地整備・商業活性化」『東洋大学大学院紀要』45, 251-261.
 2008 津曲裕次「滝乃川学園史の研究『白痴院』期の建築計画的検討」『純心人文研究』14, 1-24.

2008	横山恵美『東京種子同業組合の設立経緯と活動内容について』『生活と文化』17,
2009	苗治帥「人が集まる「場所」に関する研究—おばあちゃんたちの『原宿』, 巣鴨を通して」『流通経済大学大学院社会学研究科論集』(16) 25-44.
2010	阿部希望「近代における野菜種子屋の展開—東京府北豊島郡榎本留吉商店を中心に」『農業史研究』(44) 90-101, 2010-03.
2010	岩田満里子, 伊藤史子「コミュニケーションを誘発する広場空間についての研究」『日本建築学会学術講演梗概集北陸』1499-1502.
2010	来馬明規「曹洞宗宗門の禁煙化を願う」『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』(11) 396-391.
2011	尾崎梨紗, 三宅正弘「明治末から大正期における郊外住宅地の養蜂環境に関する研究」『日本建築学会学術講演梗概集関東』797-798.
2012	苅住昇「明治初期の植木屋(上)」『農耕と園芸』67(2) 60-65. 「明治初期の植木屋(下)」前掲誌67(3) 39-45.
2013	秋山伸一「菊花見物と菊見案内」『生活と文化』22, 71-79.
2013	江川緑「都市高齢者と商店街が共に活性化する共生社会構築に向けて, 東京都巣鴨地蔵通り商店街でのフィールドワークから」『地域活性学会研究大会論文集』5, 105-108.
2013	小長谷悠紀「遊園地の系譜としてみる江戸の植木屋文化と御成り」総合観光学会第24回全国学術研究大会「発表要旨」45-48. 「近世巣鴨にみる「空間の種類」の結合—まちの見方と風土についての研究」『日本観光研究学会全国大会発表論文集』28, 201-204.
2014	松本力也「中小小売り業者における連携関係の構築」『岩手県立大学短期大学部研究紀要』9-1, 11-22.
2015	小長谷悠紀「巣鴨の「下町っぽさ」への一考察」『日本観光研究学会全国大会発表論文集』30, 45-48.
2015	佛教文化学会第24回学術学会シンポジウム録「地域社会と仏教—巣鴨地域を中心として」『佛教文化学会紀要』(24) 1-52. 塩入法道「巣鴨地域の文化史概観(1)」, 落合崇志「巣鴨地域の文化史概観(2)」, 中川仁喜「江戸時代の巣鴨と中山道」, 鳥居愼蒼「江戸六地蔵と真性寺」, 稲松孝思「巣鴨地域における渋沢栄一の業績」白木悦生「門前町と地域振興」など

(町史・区史, 遺跡調査報告書, 博物館資料館等企画展示資料, および巣鴨プリズンの研究は除いた)

建物, 監獄や精神病院, 救済施設などが, 都市に近いが郊外であるアンビバレントな距離心象の巣鴨町, 巣鴨村に多数立地した。明治の宗教政策と都市づくりでは, 都心から追い出された寺の一部により西巣鴨の寺町がうまれた。とげぬき地蔵の高岩寺も, 明治24年に移転してきた寺である。

⑤タネ道

前章でふれた, 中山道の西巣鴨や滝野川あたりの種子卸商の集積に関する研究である。1992年のものは, 北区で実施された座談会記録である。表1に挙げた「巣鴨乃むかし」と時期が近い。その頃, 昔語りの座談会が流行したのではないか。

⑥郊外住宅

文学研究で巣鴨に大正初期住んだ文人の日記を読むもの, 文京区の大和郷の分譲地開発の解説, 郊外住宅地での養蜂環境の様子を, 上述の文人日記に探ったものである。三者三様で, リサーチ・トレンドとはいいづらいが, この地域の研究領域として「郊外住宅」というジャンルがあるとはみ

とめられる。

⑦縁日

『建築雑誌』の「広場特集」と名執論文は, ともに複数の事例のなかのひとつに地蔵通りの縁日を取りあげた。前者の写真や露店の図解などに, 後年の川添ら考現学グループの研究スタイルは似ている。川添も別の建築雑誌の編集長経歴がある。おそらくこの流れとして「おばあちゃんたちの原宿」研究がでてきたのであろう。

⑧高齢者とまち, とげぬき地蔵

とげぬき地蔵に高齢の参詣者がたくさん訪れている現象に対する初期研究は, 80年代後半から90年代にかけておこなわれた。川添登らの「おばあちゃん原宿」考現学, 倉沢進ら都立大都市研究所による「高齢者の盛り場」研究は, 複数の研究者・学生が参加した調査で, 露店商も含めた当時の通りや来街者の様相, そのようなまちに至った経緯・背景などを明らかにした。

⑨後続の巣鴨のまち研究は2類

上述のボリュームある2研究群の後に、とげぬき地蔵や地蔵通り、駅等を対象地におこなわれた研究は、空間デザインやまちの機能を考える「まち機能」探求型と商店街活性化のヒントをもとめる「商業活性化策」探求型に二大別された。

さらにいえば、研究報告が公表されない、「見えない研究」の存在も指摘できる。高齢者向け商品開発による企業内レポート、学生の卒業論文、演習レポートなどがまちなかで実施されていた。

⑩その他

領域は異なるものとして分けたが、とげぬき生活館、三菱の社宅アパート、パーマ液工場の爆発事故、隣組のうち前三者は、いずれも新しいタイプの事例紹介報告として括ることができる。

3) 考察

本章では、文献資料の蒐集方法・概況にふれた後、巣鴨に関連する（但し、戦犯拘置所関連を除いた）既存研究について、提出年による整理・類型化して①～⑩枠に分けて、概観した。

但し、本調査の文献蒐集は、既に示したように他種調査との問答をささみ断続的に実施してきており、「巣鴨ブリズン」論考類は外し、都度新たなキーワードも加えているため、けしてシステムティックな手順とはいえない。したがって、表2でみたのは、どのような領域を探る研究が出現し、それが継続したか否かまでである。

近世・近代の巣鴨や周辺地区で研究対象とされた事象はそのほとんどが、巣鴨一帯が都市の周縁部に位置付けられたことでそこに展開されたと考えられる生業や施設であった。また、それら施設や事業の種類から、「広さ」「遠さ」「近さ」を条件に、周縁部が選ばれたと言えそうである。

もうひとつのグループ、昭和戦後の研究のテーマは、とげぬき地蔵尊と巣鴨地蔵通りを中心に観察するものが主流であった。時系列でみると、まず、1970年代に、縁日が立ち人が集まる空間が、建築に造詣の深い人たちの空間デザインへの関心とともに、クローズアップされた。1980年代後半は、それが年配女性にひらかれ支持された空間

として「おばあさんたちの原宿」の枠組みに転化して継承された。後続の研究者は、空間のあり様に焦点する「まち機能」探求型と、商店街や中心市街地の「商業活性化策」探求型の二派に分かれて、研究を進めた。

謝 辞

本年度をもってご退職される田代泰久先生には、私が観光学部助手でございました頃、お世話になりました。

ご退職の年度を迎えられていたと知り、随分時が経ったと改めて思われました。豊かな知識、表情はどこか飄々と、きさくなお人柄。懐かしく思い返されます。

研究を進めていくのに、巣鴨、西巣鴨、大塚、駒込、池袋で、多くの方にお時間を頂戴し、お話ししていただきありがとうございました。お一人お一人のお話毎に、このまちが好きになっていくのを感じました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

本調査は、文部科学省科学研究費24611033（基盤C）の助成を受けました。

注

- 1) 厳密に做ったわけではないが、グラウデッド・アプローチと呼ばれる質的データの研究法を参考した。佐藤、2008：105-126。
- 2) 我がまちを語ってもらう聴き取りは、昭和20年代に区立仰高小学校（地図Ⅰの文記号）の学区域にいてその頃からまちをご存じの「巣鴨の人」をお願いした。まちの情報交換の場、共通認識の醸成の場として学校の存在が意識されたことと、協力者の居住地が学区域に集中すれば、各人の話に登場する諸地点も広範囲になり過ぎず、ある程度の中心性を持たせることが期待できると考えたためである。とはいえ、実現したヒアリングの協力者がみなこの条件にあてはまっているわけではない。
- 3) 2014年8月12日巣鴨一丁目Ⅰ氏宅にて聴き取り。なお細民地区については林、屋野編2章（石塚1995：27-59）3章（中川、1995：63-117）等に詳しい。
- 4) 振興組合化60周年記念冊子「巣鴨地蔵通り商店街2013」の座談会記事でもK氏は生家が「昭和16年頃に（中略）当時は地蔵通りよりも賑やかだった西巣鴨大根原に」店を構えたと述べている。
- 5) 豊島区制80周年記念事業。2012年10月に大正大学放送・映像表現コース、立教大学放送研究会により80篇が撮影・編集された。「No.3 麗しき大塚・巣鴨」、「No.4 焼け跡だった西巣鴨」、「No.32 巣鴨小学校の戦後」、「No.36 巣鴨の子供会での交流」、「No.50 子供の遊び場白泉寺」、「No.60 西巣鴨の小学校の友達」、「No.62 昭和29年卒業アルバム」など。

文 献

- 浅川達人 (1993) 「とげぬき地藏へ行く人行かない人」 倉沢進編『大都市高齢者と盛り場』東京都立大学出版会：83-111.
- 天野徹 (1993) 「地藏通り空間の変遷」 倉沢編, 前掲, 41-81.
- 岩田満里子, 伊藤史子 (2010) 「コミュニケーションを誘発する広場空間についての研究」『日本建築学会学術講演梗概集』F1：1499-1502.
- 小田内通敏, 1918『帝都と近郊』大倉研究所 (昭和49年復刻版 有峰書店)
- 川添登 (1991) : 巢鴨とげぬき地藏 (万頂山高岩寺) の変容と発展, 国立歴史民俗博物館研究報告 33 : 43-74.
- 川添登, 菊池勇夫 (1986) 『植木の里』ドメス郷土出版社 (2014) 『目でみる豊島区の100年』
- 小長谷悠紀 (2000) 「スペシャルインタレストツーリズムにおける旅のふくらみ—旅行記につづられた経験の分析から」『日本観光研究学会全国大会発表論文集』15 : 169-172.
- 佐藤郁哉 (2008) 『実践質的データ分析入門』新曜社
- 鈴木光蔵編 (1992) 「座談会：滝野川中山道の野菜たね屋」『北区史研究』1 : 108-127.
- 滝波章弘 (1998) ツーリスト経験と対照性の構築「『旅』の読者旅行文をもとに」『人文地理』(50) 4 : 340-362.
- 豊島区立郷土資料館 (2007) 「あ・ら・すがも—中山道と巢鴨地域」
- 中村隆, 後藤春彦, 三宅論 (2000) 「都心商店街における高齢者の余暇活動と商店の取り組みに関する研究」『日本建築学会学術講演梗概集』F1 : 563-564.
- 中山由五郎編 (1925) 『巢鴨総攬』巢鴨総攬刊行会
- 原田智子 (2003) 「盛り場・巢鴨に集まる高齢女性の『場所の経験』」『法政地理』35 : 37-48.
- 林武, 古屋野正伍編 (1995) 『都市と技術』国連大学出版
- 畢滔滔 (2014) 『よみがえる商店街アメリカ・サンフランシスコ市の経験』碩学社
- 藤谷陽悦 (1987) 「大和郷住宅地の開発」山口廣編『郊外住宅地の系譜—東京の田園ユートピア』 : 134-152.